

全日本クラブ野球選手権を2年ぶりに制した勝因は。

◆昨年まで主力で活躍していた投手3人が抜けて不安もあったが、新人右腕の寺岡大輝や桐原勇人が活躍してくれたことは良い意味で予想外の出来事だった。昨年は連覇できる自信があったにもかかわらず、信じられないような失策が重なって失点し、準々決勝で敗退。ベンチで私が何を言っても選手は上の空だった。今年はいずれも苦しい戦いだったが、選手は集中して試合に臨み、日増しに

社会人野球

監督考

和歌山箕島球友会 西川忠宏氏

成長していくのを感じた。接戦を制して優勝できたことは大きかった。

——毎年、約10人の選手が入れ替わるのはなぜ。

◆選手は大卒3年、高卒5年で一度、野球を続けるのか見直す時だと思ってい

る。いずれは野球から離れて働かなければならない時が来る。だから選手にはきちんと第二の人生設計を考えて野球をしてほしい。野球ばかりやっていてはダメだということ、私自身が箕島高校野球部時代に、恩

師の尾藤公元監督（2011年死去）から教えられたことでもある。当時、1年夏から背番号をもらっていて、野球に打ち込むあまり勉強がおろそかになってしまった。試験で1科目のうち、赤点を九つも取ってし

徹底した人間力磨き

まい、夏の県大会直前で背番号を剥奪された。悔しくて泣いたが、今となってみれば大切なことを教えてもらった。

——チーム作りで心がけていることは。

◆野球人は作らないとい

うこと。我々は、一生懸命

が、やはり06年のクラブ野球選手権初優勝の時のことは忘れられない。試合のあった栃木から尾藤監督に電話で優勝を報告したら「き



西川監督（中央） 猪飼健史撮影

にしかわ・ただひろ
和歌山県生まれ。箕島高時代は故・尾藤公元監督の下、強打の内野手として春夏計3回、甲子園の土を踏んだ。卒業後、日電近畿（現N T T西日本）に入社。1996年にチームが発足した時の発起人。99年に選手を退いて、監督に就任した。54歳。

とに力を注いでいる。選手は地元のスパーマーケツト「松源」などで働いている。雨で練習が中止になった時は「今日はおぼちゃん早く帰ってよ」と言っ仕事を引き受ければ職場の人は喜んでくれるし、選手が一番の味方になって応援してくれる。そうならば今度は、職場の同僚が「この子

ら仕事も野球もようやくやっらんねん」と認めてくれて、野球により取り組みやすい環境にもなる。

——監督としてこれまでで一番記憶に残っていることは。

◆今年で17年目になるが、やはり06年のクラブ野球選手権初優勝の時のことは忘れられない。試合のあった栃木から尾藤監督に電話で優勝を報告したら「きよう帰って来なさい。絶対起きて待っておくから」と言われた。夜行バスで戻り、訪問したときうれし涙を流しながら出迎えてくれて2人で抱き合った。本当にうれしかった。今の最大の目標は日本選手権で1勝。なんとしても達成して、応援してくれる人に恩返ししたい。【聞き手・長田舞子】